

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26285146

研究課題名(和文)身体知としての「参与しつつの観察」に関する基礎研究

研究課題名(英文)Basic research on the participant-observation as a mode of embodied knowing

研究代表者

南 博文(Minami, Hirofumi)

九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・教授

研究者番号：20192362

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、フィールドワーク初期の「場そのものが観察者に現れてくる」過程で、初学者と熟練者との間でどのような身体知の差異があるかを、現場に「入れている」状態を記述する行動特性を指標として抽出する事によって明らかにする事を目的とした。3年間の理論的および実証分析を通して1)居場所の安定性(フィールド内に自分の場ができ、自己の立ち位置、現場での暗黙の動き方、居方などに関する微視発生)、2)主体のシフト(聞き取りにおいて、こちらではなくあちら側が背景と共に聴けるようになる)、3)臨界を超える(「一通り分かる」を越えた理解と「いったん巻き込まれ」ながら自己の異人性を意識する)という段階性が見いだされた。

研究成果の概要(英文)：The present research investigated the qualitative differences between the novice and expert workers in the early phase of field entry by clarifying “indexes” of the depth of participation in the field. The cross-fields studies involving medical, clinical, ethnographic, musicological, and urban research fields revealed the following indexical attributes of the dwelling-in-the fields, 1) in-placement as exemplified in the stable positioning, movement, ways of being according to the local and implicit rules of the place; 2) shift from a self-oriented to the other-oriented attitudes and actions in the way of experiencing the field while listening to and inquiring the informants and the overall phenomenal site; and 3) crossing the boundary with respect to the understanding “within one’s own range,” loss of control and being “taken over” by others in the field which reveal one’s status as a stranger there.

研究分野：環境心理学

キーワード：フィールドワーク 参与しつつの観察 初期過程 身体知 指標 文化

1. 研究開始当初の背景

(1) 現場の知、臨床の知と呼ばれる学知の「パラダイム転換」の中で、研究者の対象への関与と個別事例の検証によってむしろ妥当性の高い対象理解が得られるという見方が市民権を得るようになった。これは、従来の対象と距離をとる「客観的」で再現可能な実験法や観察法にかわって、フィールドワークの手法が、文化人類学や民族学、社会学のみならず、法則定立が重視されてきた心理学においても「質的研究法」の一環として議論されることになった(無藤・やまだ・南・麻生・サトウ, 2000)。特に Sullivan (1953) の「参与しつつの観察」(participant observation)の方法理念が、関係の場への基本的なアプローチとして用いられることとなった(鯨岡, 1999)。

(2) 現在そこで中心を占め主要な技法となっているのは、言語的コミュニケーションに基づく「語り(ナラティブ)分析」であり、対人関係を先行的に包み込み規定している場の様々な体験様相、例えば雰囲気や匂い、体感的な感覚、気分、緊張感、リズム、風土といった事態を感知できるような、身体知(embodied knowing: 南, 1994)としての「臨場の知」が十分に明らかにはされていない。新参者が新たに現場に参入し、そこで身動きがとれ、そこで話されている事柄について最低限度には了解ができ、起きていることを記述できる段階に至る過程を、臨場の知としてのフィールドワークの学習過程として、方法論・技法論にまで体系化して用意することが求められている。

2. 研究の目的

Sullivan (1953) が提唱した「参与しつつの観察」を基礎理論として、臨場することが可能になるまでの過程を身体知の水準で明らかにする。さらに、フィールドワークの初学者に向けて、現場への参入訓練プログラムを開発するために、その訓練技法をアクションリサーチによって探索的に明らかにする。具体的には、次の2課題を取り上げる。

(1) 臨場の要件(インデックス)の抽出

フィールドワークの初学者にとっては、「場に入る」こと自体が困難である。フィールドワークの初期過程において、どのような状態に達しているときに場に入っていると見なせるのか、その行動上の目印となる「できている」という要件をインデックスとして整理することによって、観察者のフィールドへの参入段階をはかる尺度とする。

(2) 参入過程の分析

場に新しく入っていく新参者は、正統的周辺の参加(Lave & Wenger, 1991)の過程にあり、状況がまだよく見えない(意味あるものとして現われてこない)周辺のポジションから、その場で一定の役割をとることが可能な構成メンバーへと変移していく。このように現場とは「現われ」の変化を伴うフィール

ドであるが、この参入過程で起きる新参者のポジション変化を分析することによって、臨場できる状態に至るまでのプロセスを仮説的に解明する。

3. 研究の方法

(1) 臨場の要件(指標・インデックス)の抽出:

目指される「臨場」の状態について、身体知に関連する先行理論を整理し概念・用語を整理するとともに、熟練者が習得している現場の身体知を集約し、それを行動的特性で捉えられるような「インデックス」を抽出する。具体的には、「聴く」(ディープ・リスニングの場)、「いっしょにいる」(医療・看護の場)、「ものと関わる」(くらしの中の子どもにおける技能伝達の場)、「見る」(自然・都市環境を感知する場)、「面接する」(心理臨床の場)という、各研究者が携わる5つの場において、すでに臨場に達している熟練者とこれから参入を目指す初心者それぞれの現場の実践活動を共にする中で互いの体験様相の違いを二者の参入段階の「段差」として受けとる事柄を、活動中のコミュニケーションの分析や、振る舞い方の観察、およびインタビュー調査を通して明らかにし、熟練者の身体知をインデックスとして抽出する。

(2) 参入過程の分析:

フィールドへの参入過程について、観察者のポジション変化という観点から参入の段階的進行に関する仮説を整理し、短期的な現場参入の場を実験的に設けながら、参入の促進要因と阻害要因を分析する。また、参入の一連の段階的变化をモデル化する。具体的には、対象となる5つの場において、場への参入が困難な場合と比較的容易な場合とではどのような経験上の違いがあるか、さらにその進度・深度を規定する条件は何かを探る。個別領域ごとに新規参入者の初期状態の把握と評価を行い、場になじんでいくケースと参入に抵抗が生じるケースの相互比較を通して参入の促進要因と阻害要因の仮説を導出する。また、一連の参入過程について、その時間進行に伴う段階的变化について、その典型的な過程をモデル化する。

以上の2課題について、現場検証の場として、「見る」(自然・都市環境を感知する場)、「聴く」(ディープ・リスニングの場)、「ものと関わる」(くらしの中での技能伝達の場)、「いっしょにいる」(医療・看護の場)、「面接する」(心理臨床の場)という5つの体験様式及びフィールド場面を設け、相互の連関を吟味する研究会を継続実施することによるリフレクションを通じて、相互主観性の高いインデックス抽出へと到る方法論上の工夫をとることとする。

4. 研究成果

本研究で設けられた5つの臨場のフィールドにおいて、次のような研究成果が得られた。

(1)「聴く」:ディープ・リスニングの場(分担:藤枝)

「聴く」という行為は、言語を介さないコミュニケーションとして音楽の実践において最も先端的に開発されてきた。本研究は、音楽の実践を超えて、「ディープ・リスニング」(Oliveros, 2005)と名づけられた「聴くこと」の実践を集団で行うワークショップを実施し、そこでの参加者の体験過程について、事後に振り返り、多角的に相互検証を行う Debriefing (Kaplan, Wapner, and Cohen, 1978)の手法による分析を実施した。その結果、1) 現場に入る以前の構えの形成、2) 場所および場面への自己の位置づけ、3) ワークショップの事態への調整と行為化、4) 全体状況の「聴き取り」と自己との調整、5) 場の客観視、という段階的な場への入り込みの過程が分節された。これらの参与観察に基づく知見を共同研究者の間で相互検証する議論において、「聴くこと」における参与の深さの指標として、以下の観点からの問い直しが必要であることが認識された。

「聴くこと」はどれくらいの多様性を持つのか:聴覚だけでなく、触覚の延長とも言えるような感覚のモダリティを越えた経験の層への定位。

「聴かないこと」の意味は何か:深く体験に入り込むことは、自閉的な方向ではなく、むしろ聴かない状態に達することでもあるという可能性。

「聴く」という行為が内的な変容をもたらす実感:参与としてのリスニングの新たなとらえ方として、内的な変化を記述するための方法論の確立の必要性。

「聴くこと」と呼吸への関連:具体的にその場に居合わせるときの相手の呼吸への意識の発生過程。

言語と「聴くこと」との関係:言葉および文字による表出と、今まで捉えられなかった体験の水準に「気づく」際にどのような言語化が可能か。

発語行為と「聴くこと」の関係:人間が表出する声・話す・語る・歌うといったモードによる表現の多様性とその相互関係。

共鳴、共振と「聴くこと」の関連:共同化されたワークとしてのディープ・リスニングの場において体感される「ふるえ」の様相の意味づけ。

指標は、測定的な観点というよりは、以上のような「聴くこと」に関わる問いかけの深化として意義をもつ。

(2)「いっしょにいる」:医療・看護の場(分担:濱田)

看護学生は病院や施設などの現場に身を置き、1年近く、実習を重ねていく「臨床実習」や「隣地実習」と呼ばれるその現場においては、病気や何らかの健康障害をもつ人々が治療や検査、ケアを受ける場であり、同時にケアの提供者である専門職が働いている場と

いう特色がある。この現場は、時に患者や家族から「こんな世界があった」と表現されるような特殊な場でもあり、そのような場に参入する初期過程にある看護学生が直面する状況には、次のような課題と段階的な変化が見いだされた。

その場への「居方のわからなさ」:病院という場に流れている時間や空間へ対処の仕方として、廊下を歩くという基本的な動作一つにおいても、学生の歩くスピードや場所は、職員のそれとは明らかに異なっており、その違い自体に気づいていない初期段から、周囲と同じように振る舞うことができ、また病院内のナース・ステーションなどで自分が居られるポジションが定まってくる。

病気や障がいに直面している患者や家族との向き合い方:学生にとっては、患児や家族とのコミュニケーションが大きな課題となり、中には「会話ができる」ことが目標になる学生もいる。しかし、熟練した看護師は会話の有無に関わらず「いっしょにいる」ことや具体的なケアを通して、コミュニケーションをはかり、点の情報をつなげ、患者や家族の具体的な「像」を結び、向き合っていく。

また、実習前後の計4名の看護学生への継続的なインタビューを臨床心理学の面接者を実施してもらった結果、次のような体験領域のカテゴリーが見いだされた。[居場所のなさⅡ指導者との関係Ⅱ患者さんとの関係Ⅱ][同じグループの学生との比較][予想外の出来事との遭遇]個別事例の分析から、これらのカテゴリーの相互関連と、当初の「私は大変だ」という自己に向かう注意から、付き添いを行う長期入院児のリアリティに触れ、「一端は巻き込まれる」経験を經由して、相手の全てに関わっていると感じる主体のソフトが起きていることが理解された。

(3)ものに関わる:くらしの中の子どもにおける技能伝達の場(分担:坂元)

伝統芸能への参与観察の実践として、複数のフィールドでの試行を経た上で、民俗能の現地調査の過程を通して、調査者自身の参与の過程を自己モニタリングする「自己言及的」調査という方法論が編み出された。具体的には、山形県庄内地方の黒川能の現場、研究者の居住する福岡県の筑後地方での新開能の現場、さらに大学のある地域の筥崎宮の能楽教室への参入という複数の現場での現地調査および学習過程を通じた「体得」のフィールドワークが試みられた。その過程において、他所での活動である「参与1」と自身の生活圏での活動である「参与2」との間において、以下のような交錯的な深化が引き起こされた。

当初は、参与1のための知識習得を目的として始めた参与2が、自己目的化する。参与2において、人々の意味世界に関する共感的基盤が形成される。

参与2において、参与1につながる「予期

せぬ道筋」があらわれる。具体的には、土地の記憶と愛着が、個人的な感情をともなって意識化されるという経過を辿った。

参与2に研究者の能動的な参加の姿勢が、外からの観察では届かないより身体的で共感的な次元での理解と参与を達成する道筋を開くこととなった。

当初の計画にない「周縁的な道筋」を経た体得学習は、研究者個人にとっての地元への愛着や記憶を喚起する機会を提供し、それが民俗能の生き方に連なる経験の型を提供した。この過程は、「周縁的参与3」と位置づけられる参与の深化のあり方の一つを示すと理解された。

(4)見る：自然・都市環境を感知する場(分担：澤田・南)

漁業者のコミュニティに参加していくフィールドワークの数年間に渡る実施において、研究者自身が現場での調査活動を行う前提として、現場が「見える」ようになるための自身の居場所の確保が問題となる事が自覚的に理解された。その過程では、対象地の概要と研究目的に即した現場の理解が「一通り分かるようになる」段階があった後、かえって現地の人々の言葉が聞き取れなくなる一時的退行ともとれる経験があった。このような転換点について、以下のような指標的な変化を抽出した。

対象者が生活する場の中で、「腰を深く下ろす」ことができることで、研究者の視線が対象者と並ぶ位置になる。

フィールド内で一人でも落ち着いて居られ、活動することができるようになる。このことが異人性を確保しつつ自由に調査することを保証する。

調査の目的と内容がフィールドの実際に即したものに変わる。研究者が参入する前からあらかじめ持っていた調査目的を、フィールドの生活の中に入って五感を通して感じたこと、考えたことと照らし合わせながら調整していき、フィールド研究がよりフィールドに近い研究へと深化する。

都市における長期の参与観察研究から、「見る」実践とその報告の様式に次のような変遷過程が分節された。

当初に見えていた事柄は「それ」としか言えないような対象化が十分にされない体験の領域であり、都市祭礼の場合では「一生懸命走っている」「怖い」というような述語的な表現で捉えられる様相である。

参与する研究者自身の身体が、現場で臨場する事柄を取り出し、一種の「増幅」をする作用が、名づけることによって生じる。その過程において、経験の代表化が為される。

フィールドへの「住み込み」が起きることが、環境の分節と身体反応の分化との共成立として発生的に展開し、「見る」作用が分化しつつ「見られるもの」がより生態学的に妥当な様式で分節されて名指されるように

なる。

以上のように、フィールドワークの初期過程において知覚の分節と共に、対象の分化と意味化とが平行して進行する。インフォーマントにとっての環境が、研究者自身の全体的体験の様相から分節化され、有意味な対象把握となっていく微視発生的過程が生じる。

(5)面接する：心理臨床の場(分担：佐々木)

診断・治療的な関与が行われる実践現場において、相手の状態像は、その人のそばで時間を過ごす臨場の中で徐々に得られる「感じ」に反映される。相手に「面し」「接する」過程への感度を高めていく臨床的インタビューの現場において、その対象把握の微視発生的過程と、いったん面接の場から離れて経験を積んだ指導者の立ち会うカンファレンスにおいて、面接内容を検討する場にどのように参加するか、という二重の場への参加が問題とされた。次のような主題が、参与の深化に関わるインデックスとして取り上げられた。

「降りていくこと」と「帰ってくること」：心理臨床の場で日常に遭遇しないような非日常なものに触れることがあり、それに触れる事が不可欠であるが、同時にそこから日常に戻ってくる過程がないと生身の人間として活動を続けられない。

「行って-戻る」の自覚：学校現場などで、そこに居続ける人にはかえって見えない、あるいは他者に話せない次元の経験があり、臨床活動においてもフィールドワークにおいても、一度入って、そこから「戻る」ことによって、現象を話せる次元に転化する「プロのマレピト」というスタンスが重要である。

インタビュー後の重要性：録音を切った後に始まる話が一番面白いという経験則があり、初学者の場合、「その後」を聞き取り覚えておくという構えがないことに限界が現れる。「外側の物語」あるいはメタ物語という視点があるか否かが、臨床面接の水準を示す。

自分が見えてくる：カウンセラーとしての発達の中で、「自分自身が分かる」という方向に関しては終りが無いが、3年から5年くらい経験したところで一つの臨界点が見える。自分のダメなところに出会った後にどう乗り越えるかという臨床家としての課題がある。

以上、5つのフィールドでの検証作業を通じて、場への参入の過程として次の段階的な進行がある事が理解された。

居場所の安定性(フィールド内に自分の場ができ、自己の立ち位置、現場での暗黙の動き方、居方などに関する微視発生的)。

主体のシフト(聞き取りにおいて、こちらではなくあちら側が背景と共に聴けるようになる)。

臨界を超える(「一通り分かる」を越えた

理解と「いったん巻き込まれ」ながら自己の異人性を意識する」という段階性が見いだされた。

これらの過程は、すでに初期段階から「中期」へと移る段階への課題として捉えられ、今後はフィールドワークの進行における初期から中期へと変わる段階での指標の明確化を行う必要があると考えられた。

[引用文献]

Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York: Norton.
Oliveros, P. (2005). *Deep listening: A composer's sound practice*. New York: iUniverse.

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

坂元一光, 参与の周縁-庄内黒川能調査をめぐると自己言及的覚書-, 九州大学大学院研究紀要, 査読有, 第19号, 2017年, 1-18.

澤田英三, フィールドワーク初期に展開する研究者心理の微視発生に関する一考察 II: 深化の指標と理解の変化, 安田女子大学大学院紀要, 査読無, 22巻, 2017, 119-135.

坂元一光, 翁文静・宮本聡・金子真紀, 体得のフィールドワーク, 国際教育文化研究, 査読有, 15巻, 2015, 1-21.

坂元一光, 宮本聡, 変化を生きる農民能-黒川能と新開能の今日的継承-, 九州大学大学院教育学研究紀要, 査読有, 17号, 2015, 1-21.

坂元一光, 愛でる身体と作る身体-柳川の伝統手芸活動における技術的実践-, 国際教育文化研究, 査読無, 第14号, 2014, 1-13.

[学会発表](計 3件)

南博文, 書くからだの生成, 日本質的心理学会第12回大会, 2015年10月4日, 宮城教育大学(宮城県仙台市).

澤田英三, フィールド内で自分らしくあれることができること, 日本質的心理学会第12回大会, 2015年10月4日, 宮城教育大学(宮城県仙台市).

濱田裕子, 看護学生が臨地実習の場に身を置くということ, 日本質的心理学会第12回大会, 2015年10月4日, 宮城教育大学(宮城県仙台市).

[図書](計 2件)

鎌田東二, 藤枝守, 佐々木健一, 高橋巖, 篠原資明, 梅原賢一郎, 柿沼敏江, 龍村あや子, 中島那奈子, ピング・ネット・プレス, スピリチャリティと芸能, 2016, 244ページ.

南博文, 都市の精神分析, 九州大学出版会, 九州大学大学院アーバンデザインコース(編), 都市理解のワークショップ-商店

街から都市を読む, 2015, 207ページ, 16-23.

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

南博文 (MINAMI, Hirofumi)
九州大学・大学院人間環境学研究院・教授
研究者番号: 20192362

(2) 研究分担者

坂元一光 (SAKAMOTO, Ikko)
九州大学・大学院人間環境学研究院・教授
研究者番号: 20150386

藤枝守 (FUJIEDA, Mamoru)
九州大学・芸術工学研究院・教授
研究者番号: 80346858

佐々木玲仁 (SASAKI, Reiji)
九州大学・大学院人間環境学研究院・准教授
研究者番号: 70411121

濱田裕子 (HAMADA, Yuko)
九州大学・大学院医学研究院・准教授
研究者番号: 60285541

澤田英三 (SAWADA, Hidemi)
安田女子大学・心理学部・教授
研究者番号: 00215914